真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

教祖百四十年祭の年

ようぼくの自覚と喜びをもって

立教百八十九年の新春、明けましておめでとうございます。

教祖百四十年祭の年を迎えました。「諭達第四号」のご発布を受けて、御存命の教祖にご安心いただき、お喜びいただきたいと心に期して、成人のお誓いを立て、心を定めてスタートした三年千日仕切りの年祭活動も、残すところひと月を切りました。これまでに教祖のために何ができたのか、各々の歩みを振り返れば、さまざまな思いが去来することかと思います。いずれにしましても、この旬に動いたことは、これから先の歩みの種になるのであります。これまでの通り方を一人ひとりがしっかりと顧みて、次の動きに活かし繋げていきたいと思います。

教祖年祭は、子供の成人を促された教祖が現身を隠された元一日であり、それはまた、扉を開いて存命の理を以って世界たすけに踏み出された元一日でもあります。真柱様は、昨年の秋季大祭において、「親神様の思召される陽気ぐらしの世を造り出すために、教祖の手足となって働く役目を担うのが、おさづけの理を戴くようぼくである」との旨を話され、ようぼくにご期待をおかけくださいました。この親の思いにお応えできるよう、お互いにようぼくの自覚と喜びを高めて、たすけ一条に明るく勇んで励む心を定めて、教祖百五十年祭への門出をさせていただきましょう。

今年もよろしくお願いいたします。

大教会長　井筒梅夫

謹賀新年

立教百八十九年　元旦

芦津大教会

立教百八十九年の新春を迎え おめでとうございます

井筒ふみ子

教祖百四十年祭を目前にして身も心も引き締まり、教祖にご安心いただける成人への足取りを早める昨今でございます。

私の若い頃、二代真柱様から、「天理教はどのような教えですか？」と他人から問われたら「私を見てください」と答えられる人になろう、とお仕込みいただいたことがありました。この教えを伝えるのに、言葉で説くだけでなく、信仰者としての日々の態度と行動を以ってこの教えを伝えよう、とお導きいただいたのです。

その教えを受けて私は先ず、私を目にしただけで天理教の信仰者であると解ってもらおうと思い、大教会の周辺は勿論のこと、市電であろうと地下鉄であろうと、心斎橋通りであろうと出かける時にハッピを着て外出していたことがあります。あまり見慣れないハッピ姿を奇異の目で見る人もあり、中には親しげに目線を送ってこられる人もあります、同じこの道の信者さんなのでしょう。ハッピを着ると背中に天理教の文字を背負っています。「私は天理教の信者です」と行き交う人に伝えています。どのような場面でも、常に教祖のひながたを意識して行動しなければなりません。この心配りこそ、この道の信仰者としての心なのだと感じ入りました。

その頃、大教会長さんは私たちに「家に帰って、ハッピを脱いで壁に掛けたら、信仰心まで壁に掛けてしまわないように」と仕込まれていたことを思い出します。

この教えの道は親から子、子から孫へと続いてこそ道と言えるでしょう。その絶え間ない努力をしてこそ、この道をお連れ通りいただく真の喜びを末代にかけて味わわせていただけることと思います。

まだ子供たちが幼かった頃、教会の人たちとお茶を飲んで楽しんでいる時、長男の梅夫さんが菓子鉢からビスケットかお煎餅を取り出して1枚ずつ配ってくれました。最後の1枚を取り出したとき、まだ手渡していない女の子がいました。一瞬、女の子と1枚のビスケットに目をやりましたが、黙って手渡して私の元に駆け戻ってきました。自分のビスケットは無くなっていました。

年改まり、今年の2月に私は91歳の誕生日を迎えます。

今日まで共に歩ませていただいた皆様方にお礼を申し上げたいという心いっぱいでございます。昨年はかつての布教地であった台湾に、10月には北海道へと遠方の教会へ足を運んで御礼を申し上げて参りました。この後も年齢相応ではありますが皆さま方と共にたすけ一条の道を歩ませていただこうと心勇んでおります。

どうぞ本年もよろしくご厚誼いただきますよう、お願い申し上げます。

立教百八十九年 新春に誓う

節から芽が出る

日方分教会長
湯川正信

教祖のお言葉は、これまでの私の歩みをそっと励ましてくれました。教祖百四十年祭へと向かう三年千日、我が家には思いがけない節が続きました。妻や子供たちの身上・事情から不安に包まれた日日。心の向きをどこに定めればよいのか分からず、立ち止まってしまうときもありました。

それでも、これは神様が通らせてくださっている節目なのだと受け止め、家族で心を一つに、少しずつ前へと歩んできました。

今、ようやく家族みんなの心が前向きに整い、それぞれの場所で新しい芽を出そうとしている姿をありがたく見せていただきます。その芽生えは、まさに節から生まれるおかげだと感じています。

教祖百四十年祭を目前に控え、この3年を振り返ると、思ったようにできたこともあり、逆にできなかったこともあります。秋季大祭で真柱様は「つとめたらつとめただけの御守護は現れてくる。また、いましっかり動いたことは、これから先の歩みのための種蒔きである。無駄になることはない」とお話しくださいました。動けたこと、動けなかったことを見つめ直し、これから次の年祭まで、次代を担う者の育成に向き合い、尽力してまいりたいと思います。

成人の鈍い私ですが、教祖百四十年祭を機に頂いた思いを胸に、家族や教会に繋がる方々、そして地域の仲間と共に、陽気ぐらしの道を歩ませていただきます。

つとめとさづけのありがたさ

稗島分教会長夫人
竹内淳子

教祖百四十年祭の年祭活動では、自教会でお願いづとめを勤めることとなりました。

その2年目の年には、認知症の母が買い物に出たきり、十数時間も帰ってこなかったのです。夜になって、家族皆が揃ったお願いづとめ、その最中に母は帰ってきました。それぞれが心定めをし、一手一つになったと言える時でした。やっぱりおつとめってすごいなあ、と素晴らしさを実感しました。

今から約20年前、教祖百二十年祭へ向けての活動2年目の年、5男が6カ月で生まれたため、保育器で約3カ月過ごしましたが、1年間と心を定め、毎日保育器の上からおさづけを取り次ぎました。今では風邪ひとつ引かず、元気におぢばで育てていただいています。本当におさづけってありがたいなあ、と実感しています。

この喜びが勇み心に繋がり、年祭活動の間、神名流しに出させていただきました。「今日は億劫だなあ」と思うときでも、外へ出れば地域の方が声を掛けてくださるなど勇ませてくださいます。きっと教祖が声を掛けてくださっているのだと、とても親心を感じます。

真柱様は秋季大祭で、「よふぼくは、陽気ぐらしへ向かう教祖の道具衆であります。元初りのときのように、教祖のお心一つに溶けきって、それぞれの立場のつとめを一手一つになってつとめさせていただくところに、世界一れつの陽気ぐらしへの足取りは確実に進んでいくのであります」とお聞かせくださいました。一ようぼくとして、これからも地域の方々と関われるよう、神名流しは続け、お道の教えや楽しさを次世代へ繋いでいけるよう、自分自身がしっかり

学び、楽しんで陽気に通れるように、次の年祭へとつとめていきたいと思います。

日々良い種まきを

玉成分教会長
松林英也

教祖の年祭を教会長という立場で初めて迎えさせていただきます。

今までの年祭活動は、どちらかといえば「言われたことをやってればいい」という感じだったと思います。しかし、今回の年祭活動は教会長という立場ですので、自分が教会長として率先して動かなければなりません。

そこで何をさせていただこうかと思い、お願いづとめと大教会の年祭活動1年目の目標が「動く」でしたので、先ずは動かせていただこうと思い、地域の方に喜んでいただけるようにと、毎日教会周辺のゴミ拾いをさせていただきました。

年祭活動2年目の目標は、「1教会初席者2名以上の御守護」でしたが、申し訳ないことに私の教会では初席者2名の御守護は頂けませんでした。また3年目の活動目標は「1教会修養科生1名以上の御守護」でした。こちらも申し訳ないことに御守護いただけませんでした。自分では、一生懸命に日日つとめていたつもりですが、まだまだ足りないと反省させていただきました。

真柱様は、秋季大祭のお言葉の中で、「いましっかり動いたことは、これから先の歩みのための種蒔きである。無駄になることはないのである」とお言葉を下さいました。

教祖百四十年祭の年祭活動はひと区切りとなりますが、年祭の年も日々人様に喜んでいただけるように、これからもしっかりと種まきをさせていただきたいと思います。

そして、次の塚に向かう年祭に向けても日々良い種まきをできるようしっかりつとめさせていただきたいと思います。

神様がお導きくださる

東大屋分教会長
八木香織

「動く、繋ぐ、誰よりも勇む三年千日」を教会のスローガンとして掲げスタートした年祭活動。立教186年正月、三代会長の突然の出直しという大節から始まった1年目。この大節をバネにして、一手一つで通らせてもらうこととなり、教会家族、東大屋に繋がるようぼく、信者の方々が、以前にも増して教会に心を寄せてくださるようになりました。毎月の月次祭に勤めると心定めをしてくださった方、毎日の朝づとめ、遠方からはハガキ日参。また、初席、中席を積極的に運んでくださった方、若い人たちが、おさづけの理を拝戴されたりと、人の御守護を頂きました。

また、私自身も会長の理のお許しを頂き、不安だらけの日々でしたが、上級島原分教会の会長様、奥様をはじめ多くの方々に支えていただき、そのおかげで会長として勤めることができています。私は四代会長として、今まで幹雄前会長が、大切に思って勤めていたことを引き継いで、次の代にしっかり繋いでいこうと、心を定めて通っています。

ですが、年祭活動2年目、3年目にも二代会長のさまざまな身上を見せられ、思案を重ねる日が続きました。そんなとき、ふと「両親をよろしくね」という幹雄前会長からのメッセージが頭に浮かび、「親孝行させてもらうための節」と、気付かせていただき、現在は神様が、良きようにお導きくださると、どこか安心した気持ちで過ごさせていただいています。

どんな中も、周りの人や環境は、全て神様からのお与えで、ありがたいことと聞かせていただいています。年祭を迎えた後も喜び心を忘れずに、おつとめに心を込めて、教祖のひながたを頼りに明るく楽しく、いそいそと通らせていただきたいと思います。

《11月月次祭　感話》

親の理を戴けば　自由自在の御守護が現れる

芦南分教会長夫人　森　リキ

修養科を決心

私は、13人兄弟姉妹の5女として生まれ育ちました。25歳のとき、阪神淡路大震災があった年の7月に修養科に入りました。

その数カ月前の通勤中、バイクで転倒しました。幸い曲がり角でしたので、スピードも出ておらず、後からくる車もなかったので、軽い擦り傷、打ち身だけで済んだのですが、叔父から「25歳か。曲がり角でこけるっていうのは、ちょうどお前の人生の曲がり角ってことやで」と言われました。父である会長から修養科へ行くよう言われていたこともあり、「これは神様に運命を変えてもらうしかない」と思い、修養科に行くことを決めました。

すると信者さん夫婦が同じ期に入科することが決まり、そのお世話取りをさせてもらうことになりました。ご主人は肺気腫の身上、奥さんは少し認知症がありました。

父からは「自分の親と思って勤めさせてもらえよ」と言われましたので、2人を「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼ぶことにしました。毎日おじいちゃんをシャワー室につれていき、お世話取りもさせていただきました。また、おばあちゃんもしんどそうな顔をすればいつでもどこでもおさづけを取り次ぎました。

振り返れば、私の修養科は、自分がこの先通るための神様の思惑があったのだろうと、今は思います。2人のお世話取りは本当に大変でしたが、自分なりに心を込めてできたと思います。

修養科修了後、会長宅で女子青年として勤めることになり、結婚するまでのおよそ5年半の間、大きな親心で抱えていただき、親元で勤めさせていただけたことは、大きな運命の切り替えをしていただけたと思います。

どんなことでもありがたい

その後結婚して、芦南分教会の森家に帰らせていただきました。

教祖百二十年祭三年千日のはじめの年の4月に、次女をお与えいただきましたが、妊娠中に妊娠性糖尿病になり、担当医から「予定日よりも早く産んでもらいます」と言われました。をびや許しを頂いていましたが、神様からお手入れを頂くのは、どうしてだろうかと思案すると、思い当たることは山のようにありました。

そんな中、上級教会の奥様から、「子供のことでもなければ、なかなか成人させてもらえないから、いろんな経験をさせていただけてありがたいね」と言われ、私はこの言葉に心が救われました。そして、「どんなことでもありがたい。病気をしてもありがたい。大変だけどありがたい」という心を忘れてはならないと再確認できました。

お入り込みに向けて

そのとき、おぢばに帰っていた会長から、真柱様が地方講習会で沖永良部会場をご視察くださることになり、前日は上級教会へご宿泊くださると連絡がありました。また、真柱様のお入り込みには大きな理立てを運んで、親に喜んでもらいなさいとの、岩切正幸先生の話も聞かせてもらいました。

会長の帰りを待って、まずは教会家族で談じ合いをしました。母は「おぢばで聞かせていただいた話は大きな理があるのだから、我が教会に真柱様がお入り込みくだされると思って、大事に受けさせてもらいなさい」と言われ、しっかり親の理を頂戴できるよう頑張らせていただこうと心が定まりました。真柱様お入り込みの理を信者さん宅一軒一軒にまで頂こうと思い、その日のうちに、部内教会、布教所、信者宅に相談に足を運ぶと、皆さん、その尊き理に応えてくださいました。

心定めには少し足りなかったのですが、皆様の真実に頭が下がる思いでいっぱいでした。するとあと1カ所残っていた部内教会が、その足りない分ちょうどを運んでくださったのです。

こうして定めた通りの理立てを無事運ばせていただくことができました。一途に親を思って勤めた満足感と、教会に繋がる皆さんで働かせていただいた充実感で、とても清々しい気持ちで真柱様をお迎えさせていただくこととなりました。

真柱様ご来島

いよいよ迎えたお入り込み当日は、お腹の子供が十月目に入る頃でした。

真柱様は、夕刻教会にご到着されました。私たち夫婦は、飲物係として隣の部屋で控えていたのですが、上級の前会長の奥様が、少し残ったお茶のコップを持ちながら入って来られ、「真柱様のお下がりだから、リキちゃんのお腹に塗ってあげなさい」と会長に渡してくださいました。すぐに「元気に生まれておいでよ」と言いながら塗ってくれました。

そして真柱様からお流れを頂戴するために並んでいると、違和感を覚えました。母にそのことを伝えると、「破水したんだね。御守護じゃが。お流れを頂戴してから、病院へ行こう」と言ってもらい、気持ちも落ち着きました。

私たちの順番となり、真柱様は大きなお腹を見て「もうそろそろですか？」とお尋ねになられました。会長が「先ほどお産の兆候がありましたので、お流れを頂戴してから病院へ行かせていただきます」と申し上げると「それはすごいな」と驚かれた様子でした。

10時頃に病院に着き、すぐにをびや許しの御供を頂きましたが、陣痛が始まりません。看護師から「陣痛が始まらない場合は、明日の朝、促進剤を打ちます」と言われたので、会長におさづけのお取り次ぎをお願いし、「これでどうなっても大丈夫」と気持ちが治まりました。するとすぐに陣痛が始まり、1時間ほどで出産できました。本当に楽なお産で、心から御礼を申し上げました。次の日、上級の会長様から真柱様にご報告されると、真柱様からお祝いのお言葉を掛けてくださいました。

このお産を通して特に感じたのは、すべてにおいてタイミングがいいということでした。

医者から言われていた通りの時期に出産できたこと。会長がおぢばで親に喜んでもらいなさいというお話を頂いたこと。心定めの足りないところにお供えくださった真実。お流れを頂戴させていただく直前に起きた破水。会長のおさづけからすぐに始まった陣痛。生まれた子供の体重はちょうどいい3千272グラム。何よりこの出産が、真柱様がご来島されている間というタイミングで、直々にお祝いのお言葉を頂戴できた感激は、家族の末代の宝となります。

「神様の計算ってすごい！」。素晴らしいタイミングの御守護を、神様は与えてくださいました。教祖の年祭という大きな旬、このタイミングがあればこそと、大変ありがたく思いました。

これからの楽しみに

この度の教祖百四十年祭活動では、「あしみなみ子ども朝食堂」を始めました。月に2、3回、登校日の朝に食事を提供しています。

あるとき、いつも参加している家族が来れなくなりました。連絡すると、5歳の女の子が「今日は神様のごはんに行けんかったね」と残念がっていたと自宅での会話を母親から聞かせてもらいました。普段の会話の中に神様や教会のことがあるから「神様のごはん」と言ってくれていると思うと、ありがたいなと思います。

ある小学6年生の男の子は、小学校での最後のご飯を食べた後、「今までありがとうございました。

本当に美味しかったです」と言って頭を下げて登校していきました。子ども食堂の中でとても印象に残るシーンでした。

人材育成を目指し、外に向かった活動をと思って始めた子ども食堂ですが、これから先の楽しみを思い描きながら、人に喜んでいただけるようコツコツと勤めたいと思います。そして御恩報じに目覚めて、ようぼくとして立ち働く方を御守護いただきたいと強く思いながら、これから進みたいと思います。

気付けば人のたすかりを願っていた

紀周分教会　豊島　文

天理教との出合い

私は生まれ育ちは兵庫県で、子供が3歳の頃に親子で和歌山県のすさみ町に移り住み、社会福祉協議会に勤めることになりました。

紀周分教会のこども食堂に、職場の先輩に連れられたのが、私と天理教との出合いでした。初めて教会に行ったときに、教会の美奈奥さんにご挨拶をし、自然に身の上話もでき、私がひとり親であることを知って、そこからずっと気に掛けてくださっていました。

2年前、「私にも何かお手伝いをさせてください」と話をしたところ、団参のマイクロバスの運転をするようになりました。そんな中、会長さんは「ちょっと神様のお話をするね。大事なお話やから、よく聞いて」と子供たちに語り掛け、私も我が子と一緒にお話を聞きました。

その後、月次祭にお誘いを頂き、直会での空間がとても楽しく、息子も大勢で食べるご飯やお兄さん、お姉さんと一緒に過ごせて「帰りたくない」というくらいに気に入っていました。

それから少しずつ、会長さん、奥さんの人間性が見えてきて、天理教に興味を抱き始めます。「神様の教えってなんか良いなあ」と心が変わっていきました。

1枚のポスターから

今年の2月、神殿に貼ってある修養科のポスターが目に入ってきました。「人生が変わる　運命が変わる」という言葉。ちょうど私が「このままではいけない、人生を変えたい」と思っていたタイミングでした。会長さんから修養科の説明をしてもらい、たくさんの方のご尽力で入科の準備が整いました。きっかけは1枚のポスターでしたが、教会の皆さんとの繋がりや関わりがあってこそだと私は感じています。

修養科では、耳にする神様のお話がどれも新鮮で、忘れたくないお話ばかりの毎日でした。

入科前に会長さんから「修養科で聞く神様の話は、あなたにとって全てが肥やしになるから、常にメモを取るように。あなたの生涯の宝になるよ」と、1冊のメモ帳を頂きました。そのメモ帳のおかげで、修了した今でも、すぐに頂戴したお話と向き合えています。

また、「修養科では3カ月でようぼくになれる。修養科で伏せ込んだひのきしんも3倍に受け取ってくださる。だから、修養科を懸命に通ったら命がたすかり、運命も大きく変えることができる。今は年祭活動仕上げの年だから、さらにたくさんの理を上乗せして頂戴できる。本当に運命を変えたかったら、3カ月間、懸命に通りなさい」とお仕込みを頂きました。

では、私はどう通ればいいのか、何を頑張ればいいのか、そもそもどうなったら人生が変わったと言えるのかと考えました。そんなときに、大教会で「水が流れるように勇んでください」との話を聞きました。おかげで修養科の間は、「自分の人生をこう変えたい」と考えることはなく、教えを素直に受け取り、目の前の方の喜びに目を向けて通る。「どうすれば神様はお喜びになるのだろう」と素直に考えて通らせていただくことができました。

たすかってもらいたい

修養科に慣れてきた5月の下旬、

紀周で顔なじみのＳさんという方のお子さんＪ君が、小学校で急に意識を失って倒れたという知らせがありました。普段、私はＳさんとは頻繁には連絡を取り合っていなかったので少し躊躇したのですが、何のために今自分がここにいるのかと思い直し、直接Ｓさんに電話を掛けました。Ｓさんからは、一命は取り留めたが、心肺停止の時間が長く、どうなるのか分からない状況と説明がありました。私は「どうにかたすかってほしい」と願っていることと、今、修養科に来ている話をして、「あなたの力になりたい。Ｊ君にたすかってほしいから、私にできることはさせてほしい」とお願いしました。

そんなとき、修養科の担任の先生が、芦津大教会初代・井筒梅治郎先生のお話をしてくださり、詰所でも眞明組のお話を教えていただきました。医者が匙を投げた身上者の枕元で、朝三座、昼三座、夕三座の十二下りのお願いづとめを行い、次々とたすかっていったという話に感動しました。たすかりを願って、真心でおつとめをされたという話。そんな先人たちの思いを受け止めて通らせていただきたい。人の喜びに貢献することを神様がお喜びになるのなら、それ以上のことはない、と考えられるようになりました。

教会に繋がる役員さんや信者さん皆が、Ｊ君に「たすかってもらいたい」と願っており、子供同士、大人同士で繋がりがあったので、それぞれがＳさんに関わっていました。すると、周囲が驚く程、Ｓさんとご主人、兄弟の心の向きが変わってきたのです。

６月初旬に私のおさづけの理拝戴日が決まり、Ｓさんに「修養科が終わったら、すぐにＪ君にお取り次ぎをしたい」と連絡をすると、「ぜひよろしくお願いします」とお返事を頂きました。

修養科が修了し、Ｊ君の病室へ行く日がきました。「久しぶり、来てくれてありがとう！」と、笑顔で出迎えてくれるＳさん。個室の奥にあるベッドには、Ｊ君が医療機器に囲まれながら眠っていました。私は「久しぶりやなあ。覚えてる？」と声を掛けながら頭をなでました。

お医者さんから「明日、どうなるか分からない」と言われていた命が繋がり続けていること。硬直し始めていた身体がだんだん緩んでいることを、Ｓさんから聞きました。Ｓさんは目を覚まさない我が子を目の前にして、想像もできないほど苦しんでいるはずなのに、懸命に心の向きを変えようとしている。その姿を見て、私も真剣におさづけのお取り次ぎをさせていただきました。

命を繋いでいただいていること、身体に良い変化が起こり続けていること。神様の鮮やかな御守護を頂戴する日々があることに気付いたのは、このお道と出会ったからこそ。信仰のおかげで、一つひとつの出来事には必ず神様の思い、親心があるのだということが分かるようになりました。

ようぼくとして働きたい

そして教会が一丸となっておたすけに取り組む姿勢、一人ひとりのＪ君、Ｓさん、家族に対する思い。ご家族それぞれの心の変化、Ｊ君の奇跡的な回復。まだまだすっきりと御守護を頂いたわけではありませんが、これからも「たすかってもらいたい」という一心で、ようぼくとして働かせていただきたいと思います。また、ようぼくとして働かせていただくことで、心が澄み、私自身がたすけられていると感じています。

私は、本当に修養科で人生が、運命が大きく変わりました。これからは修養科の素晴らしさ、修養科で運命を変えることができた話をたくさんの方にお届けし、私と同じように１人でも多くの方にたすかっていただくのが、私の使命だと感じています。

立教百八十八年　十一月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の大いなるお慈悲にお抱え頂いて、日々を恙なく結構にお連れ通り下され、不思議自由自在の理のまに〳〵たすけ一条の上に数々の御守護を賜りまして、陽気ぐらしへとお連れ通り下さいます親心の程は、只々有り難く勿体無い限りでございます。私共は親神様の尽きせぬ御恵みに日夜お礼を申し上げ、御恩報じの道に勤しみ励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおぢばより当大教会にお許しを頂きました芽出度き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、十一月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には今日の日を楽しみに参き集いました芦津の道の子達が、絶え間なき御守護にお礼を申し上げておつとめを拝し、共におうたを唱和して、人人のたすかりと世の治まりを請い願う誠真実の心をお受け取り下さいまして、親神様にもお勇み下され、世界たすけの道の進展を御守護下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ教会長、ようぼくは、この道にお引き寄せ下さり、温かき親心にお育て頂いて、ようぼくへとお導き頂いた喜びを胸に、教祖の道具衆としての自覚と責任感を持って、ようぼくとしての役目を勇んで果たしてまいりたいと存じます。そして今の旬の働きが、先の楽しみの種になることを楽しみに、力いっぱい勤めたという充実感と喜びを以て百四十年祭を迎えることができるよう、最後の一日までとの思いで、一手一つに心勇んでたすけ一条に勤め切らせて頂く覚悟でございます。

何卒、親神様には、一同の決心の程をお受け取り下さいまして、変わらぬ親心にお導き下さり、一人ひとりが教祖の道具衆として、教祖年祭へ確かな成人の道を進ませて頂きまして、陽気ぐらし世界へ向けて着実に歩ませて頂けますようお連れ通りの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

十一月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	指図方	瀧本眞二郎	献饌長	井筒文夫	伝供	山本義範
扈者	川畑澄博	賛者	西本興正				山田道弘
扈者	加世田洋	賛者	梶川芳征				瀧本庄司
							西本義之
							浜田宣郎
							中村俊和
							岡本久昭
							花岡忠和
							新居里実
							今川聖一
							村田光伸
							湯川正信
							吉田裕樹
							川畑正博
							榎本康紀
							瀧本亘
							梶川和人
							望月慶太
							宗我道明
							齊藤洋
							森誠一郎
							松林英也
							水田秀秋
							加藤仁

てをどり	大教会長	座りづとめ	湯川正圀	地方	奥田眞治	笛	中村美津代
	井筒文夫		竹内義忠		井筒敏成	ちゃんぽん	井筒ちぐさ
	今川政治		山本義範		瀧本眞二郎	拍子木	瀧本基志枝
	会長夫人				山田道弘	太鼓	
	前会長夫人				川畑澄博	すりがね	
	岡島きよの				岩切正教	小鼓	
	岩切正義	前半	西本義之		瀧本庄司	琴	望月恵美
	河端芳雄		木村真次		浜田宣郎	三味線	山田秀子
	立花善三		中村俊和		守田清一	胡弓	岩切孝子
	吉田幸子				石川健郎		
	松本さだえ				立花善文		
	梶川りよ子				葭内浩		
	岡本久昭	後半	河合善洋		吉田裕樹		石川石美
	榎花岡忠和		宗我道明		樋川泰士		湯川照代
	梶川文子		松森誠太		川畑正博		中村寿々代
	奥田千晶				今川聖一		
	花岡由紀子				梶川和人		
					村田光伸		

喜びの奉告祭

吉野川部属・昭大分教会（山本義彦会長・徳島県三好市）は、11月30日、大教会長をお迎えして、神殿移転奉告祭を執り行った。

昭大の道は、昭和４年に理のお許しを戴き、さまざまな節により移転を余儀なくされ、これまでの40年間は借家にてつとめ一条に徹し、にをいがけ、おたすけに励んできたが、老朽化に伴い、このたび移転のお許しを戴き、前日の29日に鎮座祭を執り行った。

午前10時30分、山本会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。「信仰を培うのが教会です。明るい雰囲気の教会を目指して、会長さんを芯にそれぞれの徳分を生かして一手一つに教会の内容を仕上げていっていただきたい。そして今日を一つの吉祥として、陽気ぐらしへ向けての力強い歩みをこの地でスタートしていただきたい」と願われた。

おつとめを勤めた後、挨拶に立った山本会長は、お礼の言葉とともに「約30年前にこの家ににをいがけに来たときは、まさかこうなるとは思いませんでしたが、新しい土地で心機一転して、にをいがけおたすけに励ませていただきたい」と決意を述べた。

記念撮影後、場所を移して祝宴。参拝者の笑顔が溢れ、新たな門出を祝った。

参拝者は、29名であった。

創立100周年記念祭

神の島分教会

神の島分教会（立花善文会長・徳島県吉野川市）は、11月16日、大教会長をお迎えして、創立100周年記念祭を執り行った。

大正14年、立花周次郎を初代として神の島宣教所の理のお許しを戴き、今日まで100年の道を繋いできた。

午前10時30分、立花会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。「先人の後に続くためにも、たすけ一条の道をそれぞれの立場でできることから実行させていただく。そして、初代の信仰に立ち返って、御恩報じの心を忘れることなく、この教会を陽気ぐらしの手本としての理想の教会に仕上げていけるよう、一手一つに歩んでいただきたい」と話された。

おつとめを勤めた後、挨拶に立った立花会長は、「神の島の道を次の世代にしっかりと繋いでいけるよう、皆様の知恵と力を結集して陽気ぐらしのできる教会に近付かせていただきたい」と決意を述べた。

その後、記念撮影をし、直会では、設立間もない頃から教会に住み込んでいた方の思い出話や、南京玉すだれなどの余興で会場は盛り上がり、創立100周年を祝った。

参拝者は、47名であった。

創立100周年記念祭

琉宮分教会

沖縄部属・琉宮分教会（比嘉幹雄会長・沖縄県宮古市）は、11月10日、大教会長夫妻をお迎えして、創立100周年記念祭を執り行った。随行は竹内義忠役員。

午前9時、比嘉会長が祭文を奏上。続いて大教会長が挨拶。「御恩報じに励まれた先人たちのお陰で今がある。その思いを忘れることなく、それぞれの信仰の元一日に思いを致し、これからの歩みを思案して通っていただきたい。また、誰もが来やすい教会の雰囲気を、皆でつくっていただきたい」と望まれた。

おつとめ後の挨拶で比嘉会長は「今日を新たな吉祥として、教会内容の充実を目指して、ようぼく、信者の皆様と共々に歩んでいきたい」と決意を述べた。

その後、記念撮影。直会では、一人ひとりが信仰の元一日や、今の心境を語り合うなど、和やかなひと時を過ごした。

参拝者は、30名であった。

婦人会総会開催

婦人会

11月24日、婦人会芦津支部（井筒年子支部長）は大教会で総会を開催。401名が参加した。

おつとめを14交替でつとめた後、式典。最初に婦人会本部からの祝辞を井筒支部長が代読し、挨拶。「もっと多くの実動ようぼくを増やすには、私たちが教えを学び、身近な人にそれを伝えなければならない」と述べられた後、「来年はかぐらづとめにこもる親心を学び、その大切さを周囲に伝え、おつとめを心を込めて勤める人を一人でも多く増やしていきたい」と婦人会としての目標を示された。

続いて大教会長の祝辞。「私たちは教祖からおさづけの理を戴いた瞬間から、骨の髄までようぼくであり、教祖の道具衆としての自覚を持って通らせていただくことが肝心」と示され、さらに次の年祭に向けての人材育成について、「50年先、100年先は見えないが、確かに見えている次の代へしっかりと信仰の喜びを伝えていくことが大きな役割である。おさづけを取り次いで人だすけのできるようぼくへと育ててほしい」と婦人会への期待を述べられた。

その後の記念講演では、山名大教会長・諸井道隆先生が登壇され、「教会でおつとめを勤める意義」をテーマにお話を下さった。

諸井先生は、「自分さえ良ければ人はどうでも良い、という我が身勝手な心のほこりを払い、陽気な心、人をたすける心になっておつとめを勤めるから、陽気ぐらしに近づく御守護を頂戴することができる」と示され、おつとめを勤める人々の心の在りようが肝心と語られた。また「おたすけの心で勤めるという目的意識を皆で共有し、一手一つに勤めることが大切」と、おつとめを勤める際の心遣いについて丁寧にお話しくだされた。

布教推進隊

布教部

各教会、またようぼくの布教力と布教意欲の向上を目指し、９月から始まった布教推進隊は、12月２日に全国13カ所のブロックでの開催を終え、年祭活動仕上げの年に、国々所々で芦津の教友が勇んだ布教実動を展開した。

〈福岡ブロック〉

11月16日　門司分教会

派遣員の趣旨説明の後、グループに分かれてねりあい、昼食を挟んだ後、３班に分かれて神名流し、路傍講演を行った。

実動に向けてのねりあい

実動終了後の教会での振り返りでは、「午前のねりあいで、お道の素晴らしさについて、改めて考えるきっかけを頂いた」「経験豊富な先生の路傍講演を聞かせていただき、大きな勇み心を頂いた」との声が聞かれた。

参加者は41名であった。

〈北海道ブロック〉

11月16日　當別分教会

派遣員の趣旨説明の後、駅周辺で神名流し、路傍講演、ゴミ拾い、その後、住宅地での戸別訪問、リーフレット配りを行った。

駅前での路傍講演

布教実動終了後は、教会で振り返りを行い、「皆で心勇んで神名流しなどのにをいがけさせていただき、とてもありがたい一日となった」「これからもますます勇んで実動させていただきたいと思える、いい機会となった」との声が聞かれた。

参加者は21名であった。

〈奈良ブロック〉

11月30日　詰所

２人１組でのロールプレイ

２回目の開催となった今回は、井筒文夫役員の挨拶の後、２人１組となって戸別訪問のロールプレイを行った。その後、バスで移動し、柳本町周辺で戸別訪問。実動後は２班に分かれて振り返りを行った。

参加者からは、「普段と違う人、違う場所での実動はいい経験になった」「今後も定期的に活動の機会があればありがたい」などの声が聞かれた。

参加者は14名であったが、遠方からの参加者もあり、充実した活動となった。

〈長崎ブロック〉

12月１日　島原分教会

派遣員の趣旨説明の後、教会周辺で神名流しを行った。

実動終了後、教会に戻っての振り返りでは、「普段一人ではなかなかできないが、皆で気持ちよく神名流しができ、ありがたかった」「とにかくやることに意味があると感じた。これからは少しでも時間をつくって、布教に出たい」などの感想が聞かれた。

教会周辺での神名流し

参加者は30名であった。

〈奄美大島ブロック〉

12月２日　大島分教会

派遣員の趣旨説明の後、にをいがけドリルを実施。２人１組となって声掛けなどのロールプレイを行った。その後、教会を拠点にペアを組んで戸別訪問を行った。

住宅地での戸別訪問

実動終了後、教会でグループに分かれて振り返りを行い、「初めての戸別訪問だったが、やりがいを感じた。今後も続けたいと思う」「おさづけを取り次がせていただくことができ、おたすけできるありがたさを感じた」との声が聞かれた。

参加者は26名であった。

直属巡教、部内一斉巡教

教祖百四十年祭を迎え、次の塚へと向かって、大教会の活動方針の徹底を図るため、直属教会、部内教会への巡教を執り行う。

直属巡教（2月～3月）

巡教員、巡教先は次の通り。

大教会長＝靭・日方・姶良・大島・四ツ山・甲邊・豊野

井筒敏成＝稗島・芦浪・明道

井筒文夫＝島原・津和・入江・芦明照・真明彰化・真伯

湯川正圀＝天保山・芦華・芦明徳

瀧本眞二郎＝尼崎・島下・紀周

岩切正教＝本津・和鎭・本氣

奥田眞治＝日高・當別・天津

竹内義忠＝勝明・神の島・芦ノ郷

山本義範＝吉野川・大冠・神滝本

山田道弘＝直轄・門司・兵庫眞洲

岩切正義＝東津・青木・本明勇

瀧本庄司＝沖縄・芦東

部内一斉巡教（3月～6月）

巡教員、巡教先は次の通り。

大教会長＝春日出町・加津佐・東大屋・紀内・今津原・芦姫・津阪

井筒敏成＝三好・上郡・脇町・徳三・福・本伊丹

井筒文夫＝芦名・畦川・吹田・東祖谷・祖谷川・善徳・晝間・井内谷

岩切正教＝大玉・芦山都・日名南

奥田眞治＝津泉・玉成・芦玉・芦眞勇

竹内義忠＝徳修・吹櫻・日台・日幡・和草・大清

山本義範＝芦船・東向・泉砂川・鷺洲

山田道弘＝東淀川・西ノ庄・山城谷・昭大

加世田洋＝昭心・富島・鎭名

岩切正義＝福田荘・上池・北地・薩洲

瀧本庄司＝本京櫻・有家・末宝・島長

西本義之＝島原港・島百合・琉宮・芦沖

葭内　浩＝白地・徳上・御谷・津阪部

浜田宣郎＝東迎・紀船・神輝誠・津浪

木村真次＝西浜・紀志・白野江・神甲

中村俊和＝矢部川・鶴洋・鳥栖・苅田町・芦門

石川健郎＝加島港・海部川・紀野本・芦美屋

樋川泰士＝芦南・名瀬港・芦金久・大笠利

奥田正儀＝東天童・島新・眞一・東鎭

河合善洋＝立治・南向・東布施・芦日眞

花岡忠和＝上有明・輝浪・甲山・四ツ海

今川聖一＝北勝・芦勝・東倶・恵庭・太美

湯川正信＝和阪・理風・大眞永・真大富

川畑正博＝大関門・芦島鶴・二名・笠戸

榎　康紀＝東大木・津雲・丸芳・笠松

梶川和人＝大棚・大崎原・芦広・美和名

齋藤　洋＝芦明眞・渭山

濵本孝徳＝脇西・高清・東脇町

吉田賢治＝海南・明慈・明高

南方洋一＝稲津・津勝・周宝

北村　浩＝奄美笠・大朝・芦大熊

荒木志朗＝冷水・畦浜・順世

原田晃雄＝豊崎・毛見・鎭惠

森誠一朗＝島浜・大正町・島大

谷上行夫＝小松ヶ原・浪華浦・真大奄

日樫勝郎＝照南・南國・芦出水

木綿の会開催

11月29日、婦人会芦津支部は木綿の会を開催。婦人会員5名と少年会員8名が参加した。

最初に本部神殿で参拝し、記念建物と南右第2棟の教祖百四十年祭特別展示「おやさま」を見学した。特別展示では、教祖が監獄署で枕に使われた履物や、勾留中に梶本宅から毎日お湯を入れて運ばれた鉄瓶、初めて教祖が女鳴物を教えてくださったときの琴、三味線など、貴重な資料を拝見した。

詰所での昼食後、詰所内で草引きひのきしん。暖かな心地よいお天気の中、子供たちと共に賑やかに、楽しい時間を過ごした。

教務部報

教養掛（9月～11月）

主任

木村　真次

教養掛

山田　大幸・川畑　俊一
北村　浩・瀧本一太郎
松森　明美・加世田陽子

教人資格講習会第156回修了

宮﨑　博（青　港）
洪　善和（真明彰化）
立教188年11月10日

修養科第1011期修了

泉　みゆき（加津佐）
濱本　元徳（島原港）
井上　隆文（理　風）
榎　理恵子（芦ノ郷）
西谷　幸子（芦明徳）
立教188年11月27日

ようぼく講習会修了

瀧本　庄司（紀　周）
武藤　哲想（紀　周）
奥田　大介（周　宝）
立教188年11月16日

おさづけの理拝戴《10月》

石丸早奈枝（鳥　栖）
原　節子（鳥　栖）
中村　紗映（甲　山）
八木　陽萌（東大屋）
八木理栄子（東大屋）

初席《10月》

〈2名〉東大屋、鳥栖
〈順序運びより　4名〉
白谷　莉瑚（四ツ山）
〈拝戴日順　6名〉

学生生徒修養会

大学の部

3月4日～8日

4泊5日の合宿　受講御供 10,000円

高校卒業生コース

3月10日～12日

2泊3日の合宿　受講御供 5,000円

申込締切はいずれも2月15日
要項・申込用紙は詰所・大教会事務所まで

月例統計（自令和7年1月1日～至令和7年10月31日）

名称（）内教会数 ＼ 項目	初席	のお理さ拝づ戴け	修養科修了	教人
大教会（1）	10	5		
靱（13）	2			
東津（23）	4	3	5	
吉野川（29）	7	5	1	
島原（16）	8	9	2	
日方（15）	4	5		
稗島（7）				1
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）		1		
津和（12）	2			
門司（6）	4	4		1
當別（6）	2			
大島（26）	10	6	6	1
沖縄（3）				
尼崎（2）	1	1	1	
四ツ山（5）	3	3		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）	1	2		
甲邊（1）		1		
芦華（1）				
天津（1）	1	1	1	
入江（1）				
豊野（1）	2			
紀周（3）	3	2	2	1
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）				
芦ノ郷（2）				1
本明勇（2）				
明道（1）		1	1	
芦東（1）				1
和鎮（3）	1	2		
神滝本（1）				
芦明徳（1）	3	1	1	2
真明彰化（2）	10	1	2	
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	78	53	22	8